



宮代紀行

西原地区を行く

開催期間 平成20年7月19日(土)～10月26日(日)

宮代町郷土資料館

〒345-0817 埼玉県南埼玉郡宮代町字西原289

TEL 0480-34-8882 FAX 0480-32-5601

期間中の休館日

7月22・28日 8月4・11・18・22・25日 9月1・8・15・22・24・29・30日

10月1～3・6・14・20日

宮代紀行 西原地区を行く

はじめに

宮代町はおよそ2万年前に人々が移り住み、以来、連綿と人々の暮らしが営まれてきました。こうした人々の歴史は、町内の各地域によってそれぞれの風土に根ざした成り立ちや様相に特色が見られます。一方、私たちが住んでいる町内の各地域の細かな歴史について接する機会は非常に少ないのでしょうか。そこで、今回から企画展の一つとして「宮代紀行」と題して町内各地域の特色ある歴史や文化について紹介して行きたいと思います。

「宮代紀行」の第1回目として、かつて中世の館跡などがあり、近世初頭旗本服部氏の陣屋も置かれ百間領の中心的な所であった西原地域を取り上げました。発掘された考古資料、古文書、そして西原地域に残る各種の資料から、一万年以上にもわたる西原地域の歴史と文化、そして民俗行事について展示しました。

本展示が、長い間受け継がれてきたさまざまな歴史や文化に触れる機会となり、そして地域の新たな発見と理解、そして愛着につながれば幸いです。

平成20年7月

宮代町教育委員会
教育長 桐川弘子

凡例

- 1.本書は平成20年7月19日から10月26日まで開催される、宮代町郷土資料館平成20年度企画展「宮代紀行 西原地区を行く」の展示図録です。
- 2.展示の企画、図録の執筆、写真撮影、編集は当館学芸員青木秀雄が担当しました。
- 3.資料の中には、紙面の関係で掲載できなかった資料があります。また、期間中、展示替えをする場合があります。
- 4.企画展の開催にあたっては、下記の方々よりご指導、ご協力を戴きました。

また、このほか多くの皆様に各種調査等にご協力を戴きました。(順不同・敬称略)
佐野市郷土博物館、青林寺、西原地区自治会、西原中央団地自治会、姫宮神社、
新井隆夫、板垣時夫、岩本友和、小田充宏、尾花久、折原静輔、齋藤幸二郎、齋
藤孚、佐藤嘉雄、島村明、園部いち、高岡大純、中村啓子、並木一美、成田良夫、
西原地区の皆様

西原の信仰と行事

西原地区には、古くから行われているムラの信仰や行事がいろいろあります。

1月24日は、勝軍地蔵尊を祀る「地蔵様の縁日」です。当番が団子を作り、勝軍地蔵尊にお神酒と共にお供えします。また、団子を各家に配ったりします。なお、勝軍地蔵尊は火伏せ、火防の仏様です。



地蔵様にお供えする団子作り

2月1日は、「万年講」と呼ばれ、大山講と榛名講の代参を決める日です。西原に古くからある家が順番にヤド(当番)となり、次の代参を決めるくじを作るなど講の世話をしました。



万年講の様子

2月(古くは3月)始めての午の日を「初午」といい、子どもたちが青林寺にある稻荷神社でお籠もりをしました。

3月末から4月初めには、群馬県にある榛名神社を信仰する榛名講が行われ、同じ時期、神奈川県伊勢原市の大山阿夫利神社を信仰する大山講(石尊講)が行われました。



榛名神社



大山阿夫利神社

7月21日(現在は近い日曜日)は「お獅子さま」といって、悪疫退散を願い獅子頭を持って一軒ずつまわる行事が行われます。

このほか、三重県にある伊勢神宮に参詣する伊勢講も江戸時代から行われていました。

万年講

万年講は、基本的に大山講、榛名講にかかわるもので、毎年2月1日に行われていました。この万年講については、江戸時代中期から平成4年までの文書が20点余り残されています。

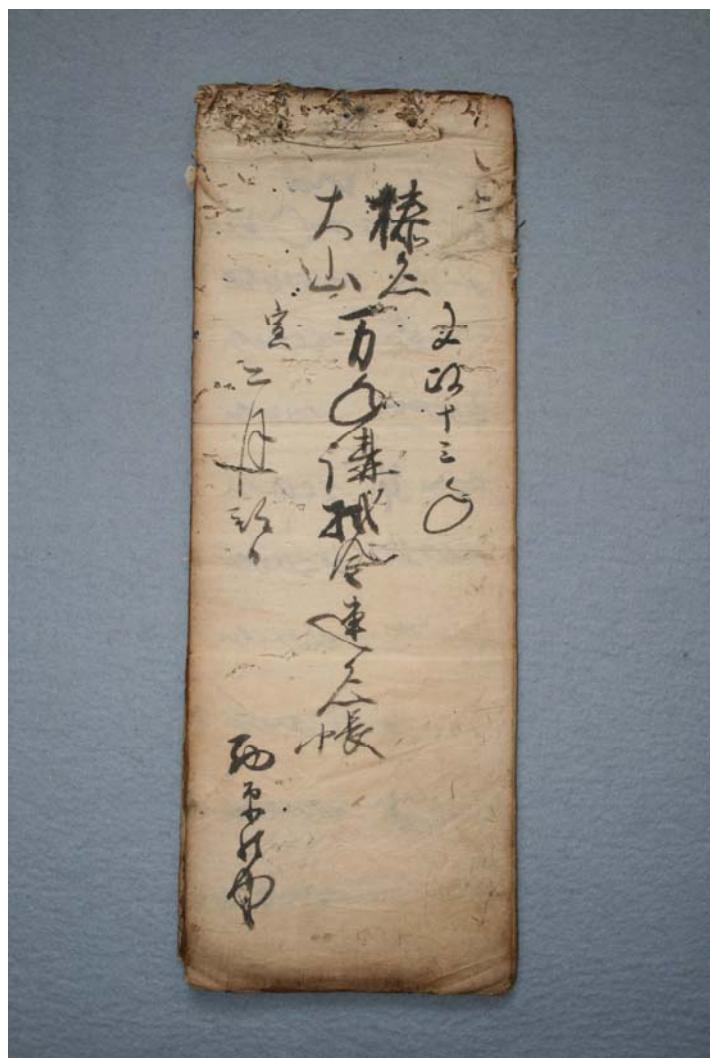
最も古い万年講の文書(帳面)によると、講は江戸時代中期、明和8年(1771)から確認できます。この万年講の当初の文書には、講からの貸付金に対する講員の利息が記載されています。また、明和8年(1771)の記録には「宿」の文字も見られ、当時、講で宿を決めて集まりを持っていたようです。安政5年(1776)の記録から、講が代参を立てたことが分かります。具体的には寛政13年(1802)以降、毎年榛名と大山に代参を立てていることが記録に現れています。

このほか、西光院の行基会(行基様)の御札代金の記録も見られ、御札を各家に配っていたことがうかがえます。

このように万年講の文書は、大山、榛名の講金や代参等が記され、約220年余りにも渡る地域の記録として貴重なものです。



獅子頭でお払いをする様子



榛名大山万年講掛金連名帳

縄文時代のムラ

西原地区には、地蔵院遺跡や伝承旗本服部氏屋敷跡などの遺跡があります。ことに、地蔵院遺跡は現在の郷土資料館、ふれ愛センター、百間小学校一帯に広がる遺跡で、縄文時代の住居跡などの遺構や遺物が多数発掘されており、縄文時代のムラの一端が明らかになっています。

地蔵院遺跡の調査は、昭和61年度以降8か所ほど行われた。その結果、旧石器時代約2万年前の石器をはじめ、縄文時代の住居跡は早期（約7,000年前）4軒、前期（約5,500年前）5軒、中期（約4,500年前）7軒が発掘され、当時使われた土器や石器も多量に出土しました。また、古墳時代4世紀の住居跡1軒が発掘され、土師器も出土しています。なお、14世紀～17世紀の堀、井戸、柱穴なども多数発掘されています。



地蔵院遺跡航空写真（平成元年度調査）



縄文後期の土器



軽石製の浮子（うき）



打製石斧

やかた 館と寺院

西原には、集落の中央をほぼ東西に貫く一本の道があります。長さ約500メートル。馬場跡であったと伝えられ、江戸時代中期の地図にも描かれており、古くから西原地域の主要な道であったことが分かります。

平成12年度、平成13年度に行われた伝承旗本服部氏屋敷跡遺跡の発掘調査では、この道の北側のやや奥まったあたりから15世紀後半～16世紀の堀の跡や当時の陶器類等が出土しました。

一方、この道の東側にあたる郷土資料館付近でも、14～16世紀の館の跡等が発掘されています。さらに、資料館近くにある地蔵院には、平安時代末期から鎌倉時代初期の阿弥陀如来坐像(町指定文化財)があります。西光院の阿弥陀三尊像(国指定文化財)に次ぐ、古い仏像です。

道の西端は北に向かって直角に折れ、50mほど行った突き当たりに青林寺があります。室町時代の板石塔婆や宝篋印塔があり、古い寺院であると思われます。

このように、東西につらぬく道に沿って古くから館等が造られており、中世百間領の中心的な地域であったと考えられます。



天目茶碗(地蔵院遺跡出土)



皿(伝承旗本服部氏屋敷跡遺跡出土)

伝承旗本服部氏屋敷跡遺跡の調査

じぞういんあみだにょらいざそう 地蔵院阿弥陀如來坐像（宮代町指定文化財）

地蔵院の脇仏として伝來したもので、ヒノキ材の寄木造、像高 45cm、膝張 38.5cm を測る仏像です。

この仏像は、いわゆる平安時代末（院政期）の定朝様式による如來像の特徴を示しており、西光院の阿弥陀三尊像（国指定重要文化財）よりやや遅い、平安時代末期から鎌倉時代初期（12世紀末葉）の仏像と考えられています。なお、後世に大幅な修復が施されており、本体には欠損の跡も見られます。

町内はもとより、県東部地域に遺る古い仏像として貴重なものです。



はん しょう 半鐘

地蔵院にある半鐘で、仏事に用いられたものです。また、一時、火の見やぐらの半鐘としても用いられていたそうです。

高さ 63cm、最大径 36.5cm を測り、江戸時代中頃の「明和 5 年（1768）8 月吉日」の銘が記されています。「宝珠山地蔵院法印覺了代」とあり、山号を「宝珠山」と称していたことが分ります。また、「西原、煤戸、台越」の地名が記されています。

この半鐘は、その銘によると「佐野天明 てんみょう
金屋町鑄物師 丸山善太良」とあり、当時、日本有数の鑄物産地であった、佐野天明（栃木県佐野市）の鑄物師の手によって造られたことが分ります。

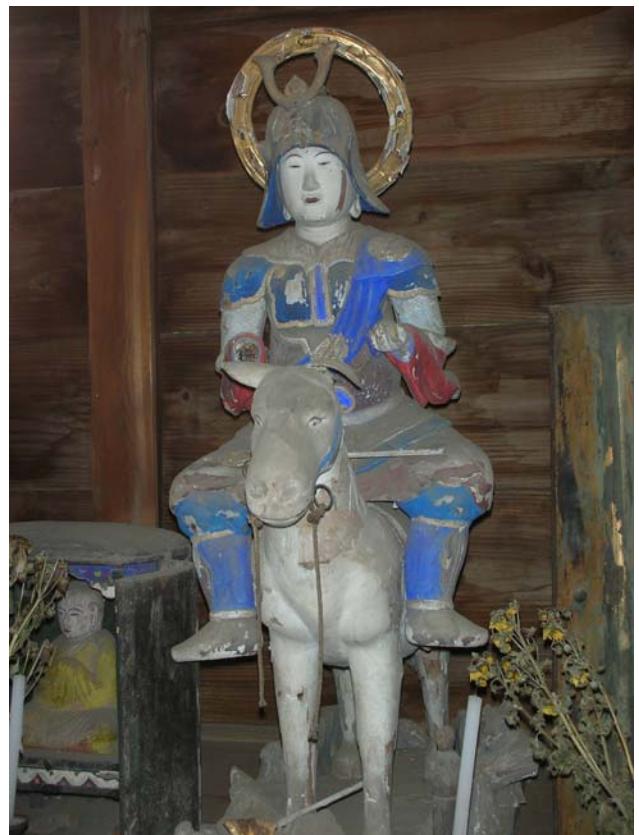


勝軍地蔵尊

地蔵院の本尊で、白馬にまたがり、甲冑を身に着けています。高さ約90cm、奥行き約80cmを測り、江戸時代中頃に造られたものと考えられます。

勝軍地蔵尊は火伏せ、火防の仏として信仰されており、「耕地内の民家が火事になったときに、白い馬が駆け巡って火を消した。この時、勝軍地蔵尊は白い馬に乗っており、よく見ると赤くなつて汗をかいていた。」という伝説が残されています。

1月24日が縁日で、今でも団子をお供えするなど地域の人々に深く信仰されています。



青林寺

青林寺は『新編武藏風土記稿』によると、「真義真言宗、東村西光院末星谷山千手院真光坊と号す。中興法流の開山宥誠、明和4年(1767)11月28日寂す。本尊不動を安んず。」とあります。また、千手觀音を祀る觀音堂があることも記されています。平成19年5月に新しく本堂が建て替えられましたが、それ以前の本堂は江戸時代末期の建物でした。

室町時代の板石塔婆や宝篋印塔が残ることなどから、中世以来の古い寺院であることがうかがえます。

寛政10年(1798)「新四国八十八か所」と称し、四国八十八か所を模して埼玉郡、葛飾郡内に靈場が創設されましたが、青林寺はその第83番の寺院でした。ご詠歌に「なにしおふ はなにこころののこるなん そでのかほりハ のちのよのため」と詠われています。



旧本堂(昭和40年代)

古文書に見る西原

西原地区は、江戸時代の初め百間領三千石を領した旗本服部氏の支配地でした。

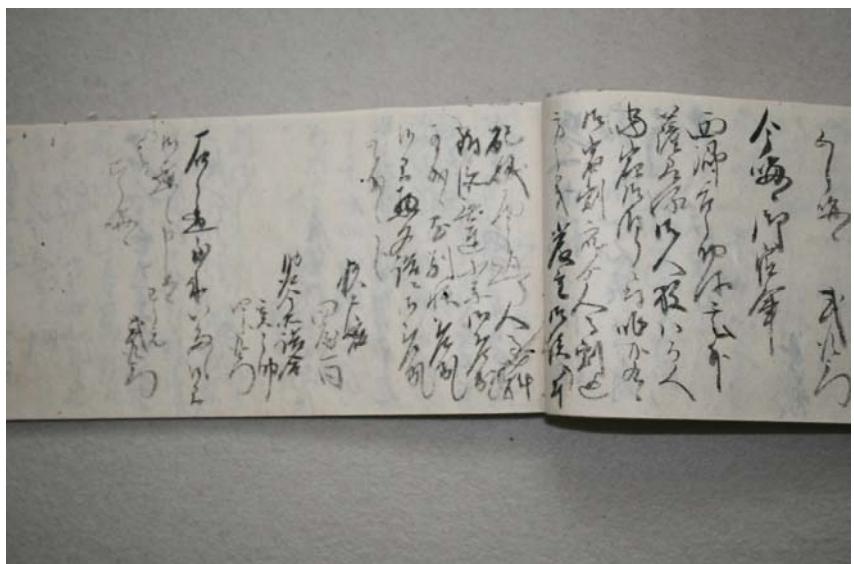
服部氏の支配の後、天領、旗本朽木氏、天領、岩槻藩小笠原氏領、再び天領と変わり、享保10年(1725)頃から旗本森川氏の支配となり、幕末まで続きました。こうした中、西原地区は百間村の一部として西原村とも私称され、江戸時代中期頃からは百間西原組と称されるようになりました。さらに、西原組は上組と下組にわかれ、今日の西原地区は大部分が下組に属していました。この頃の年貢皆済目録や五人組帳など、当時の村の様子がわかる文書が多く残されています。

百間西原組は、明治初期に正式に百間村から独立し、明治17年には他の百間各村と連合して百間中村連合戸長役場を設置、明治22年にはそれらの村が合併し百間村となりました。そして昭和30年から宮代町に属し、今日に至っています。

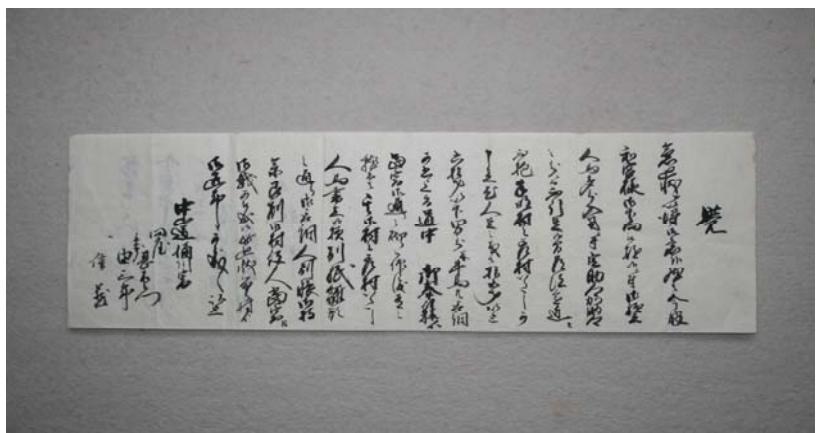
なお、西原地区には、明治17年からの百間中村連合戸長役場が青林寺に置かれました。さらに、大正14年には百間小学校前に百間村役場庁舎が完成し、その後、昭和35年宮代町中央に宮代町役場新庁舎が完成するまで使用されるなど、江戸時代初期や明治時代以降の行政の中心地であったと言えます。



年貢皆済目録



伝馬触留帳(西郷吉之助宿泊関係)



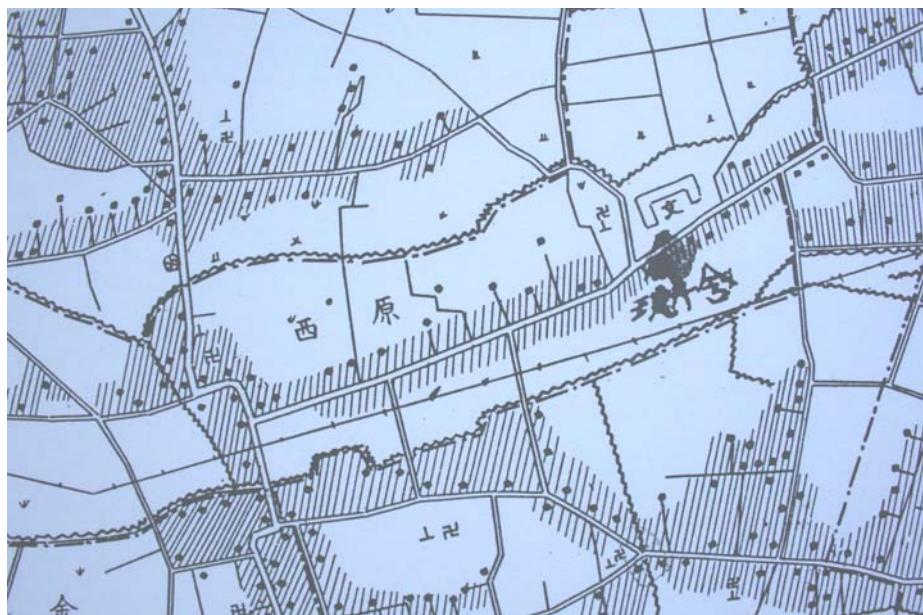
覚(和宮下向関係)



ため沼争論絵図(部分拡大) 江戸時代



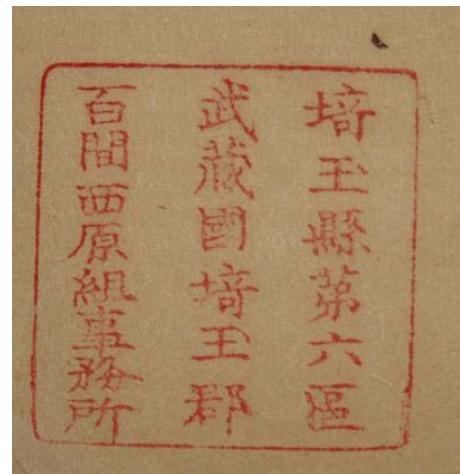
字切り図(部分拡大) 明治時代



宮代町全図(部分拡大) 昭和 33 年



斎藤紫山の筆子塚(江戸時代)



百間西原組事務所印影(新井家文書)



旧百間村役場序舎 昭和 40 年代



旧百間村役場序舎二階の様子 昭和 30 年代



百間小学校航空写真 昭和 30 年代



消防小屋 昭和 40 年代

昭和 40 年代の航空写真（西原地区）



宮代町郷土資料館